

## 古琉球紅型の型紙の外寸と名称および館蔵（大黒屋型）との比較

Outer sizes and valid denominations of old paper crafts of BINGATA, and comparison with DAIKOKUYA-GATA of KANKURA's collections

又 吉 光 邦

## 【目 次】

はじめに

## 1. 琉球紅型の型紙

- 1.1 琉球紅型の型紙のデータ
- 1.2 琉球紅型の型紙のサイズ
- 1.3 型紙の外寸／内寸の長辺と短辺

## 2. 琉球紅型の型紙の外寸

- 2.1 沖縄県立博物館収蔵型紙と沖縄県立芸術大学収蔵型紙の外寸
- 2.2 外寸よる型紙サイズの法則
- 2.3 型紙の外寸の名称とその妥当性
- 2.4 模様型と“中手”
- 2.5 型紙の外寸サイズと彫り方
- 2.6 E, Y, Xに分布する型紙

## 3. 琉球紅型の型紙と館蔵型紙の比較

- 3.1 館蔵収蔵の型紙
- 3.2 型紙の長辺と短辺の比

## 4. まとめ

付録

## はじめに

古琉球紅型の型紙<sup>1</sup>にのサイズについての研究は、渡名喜 [12] による城間栄喜氏の紅型ノートをもとにした調査報告と、鎌倉 [4-6] や岡村 [7] の調査報告・研究、そして與那嶺 [2] の考察、平田 [10] らによる統計解析手法による研究によって、学術的な通説が与えられている。しかしながら、これらの調査および研究では、型紙のサイ

ズ測定についての明確な基準が示されていない。岡村 [7] は「丈」とし、鎌倉 [4-6] は「縦」、渡名喜 [12]、津波古 [1]、與那嶺 [2]、平田 [10]、星 [8] は、不明である。

本論文では、古琉球紅型型紙のサイズ測定について明確な基準を与え、外寸（型紙そのものの大きさ）について、統計解析手法により分析した結果を報告する。結果的には、型紙のサイズの基準を「長辺」と「短辺」にした再調査と統計解析により、既存の通説への再考を促す結果を得ることとなった。また、本論文の測定基準を用い

<sup>1</sup> 本論文では、『沖縄の染織（Ⅱ）紅型型紙編』（沖縄県史料調査シリーズ第1集・沖縄県文化財調査報告書第126集、沖縄県教育委員会、徳間書店、1997）にある、沖縄県立博物館と沖縄県立芸術大学収蔵の紅型型紙を指す。

れば、沖縄県内外の型紙の判別に利用できることを示す。

また、沖縄県立博物館収蔵の型紙と沖縄県立芸術大学収蔵の型紙を同時に取り扱った、はじめての学術的研究でもある。

現在の我々が目にすることの出来る<sup>いにしえ</sup>古の紅型は、その色鮮やかな色彩や吉祥文様の多用、そして技法にその特徴を認めることができ、そこに目を奪われがちであるが、失われた伝統的技法が、紅型の型紙のサイズにもある<sup>2</sup>ことを本論文は明らかにした。

ここで、以後、本論文で単に紅型<sup>3</sup>と表記する場合は、明治中期以前における琉球での染織技法を指すこととする。

## 1. 琉球紅型の型紙

### 1.1 琉球紅型の型紙のデータ

本論文で、統計解析処理に用いる型紙のサイズ(外寸)は、沖縄県教育委員会によって調査、公表された『沖縄の染織(Ⅱ)紅型型紙編』(沖縄県史料調査シリーズ第1集・沖縄県文化財調査報告書第126集、沖縄県教育委員会、徳間書店、1997)のデータを用いた。

統計解析処理に用いた総データ数は、沖縄県立博物館(県博)収蔵の鎌倉芳太郎が蒐集した1414点の型紙から1323点。また、沖縄県立博物館(県芸)収蔵の590点の中から、558点の合計1881点<sup>4</sup>である。

古琉球紅型の型紙の総数は2004点である

<sup>2</sup> 『紅型に秘された祈り ～今、明かされる紅型の秘密～』は、紅型の隠されたデザイン法を明らかにした拙書である(共著者:佐久本邦華, 沖縄教販, 2006)。

<sup>3</sup> 現在、盛んに目にする「紅型」は、新しい当て字。形付染物で多色染模様のもを“びんがた”、藍染を“えーがた”と呼んでいた。これに漢字が当てられた文献上の初出は、鎌倉芳太郎の『琉球美術工芸に就きて』(1925)である。久貝典子の研究[3]に詳しい。

<sup>4</sup> 源河葉子の論文[22](p.13)には、「郷土博物館は、約200点の紅型類と3600枚に上る紅型型紙を収集していた」とある。戦火で紅型を含む多くの文化財が焼失したことは、実に惜しまれる。

が、備考に「伊勢型紙か」等と注記された型紙は除いた。また、内寸が外寸より大きな型紙もあり、データ信頼性向上の観点から、それらも除いた。さらに、型紙の内寸、あるいは外寸の一部でも欠落があれば、それらも除去した。その結果93.86%(総計2004点中1881点)の型紙を得、それについて、統計解析を行う。除去した型紙は、付録に掲載して今後の助けとした。

### 1.2 琉球紅型の型紙のサイズ

型紙のサイズの測定は、型紙のサイズの基準を「縦/横」から、「長辺/短辺」とした。この操作により、型紙を文様の配置から分離して取り扱うことができる。

図1は、型紙のサイズの基準を「縦/横」とした場合のデータの誤謬を示す。

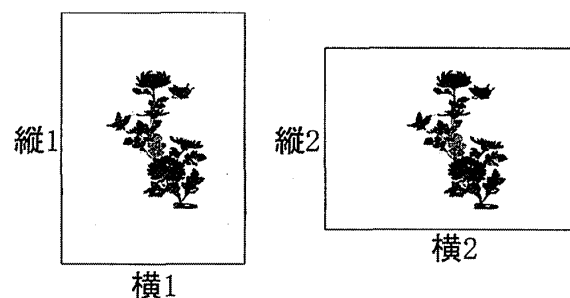


図 1.2.1 文様の配置と型紙の縦と横

図 1.2.1 は、型紙を模した矩形を立てて配置(左)した場合、および寝かせて配置(右)した場合に対して、大きさの同じ文様を配置したものである。つまり、辺の長さ縦1=横2、横1=縦2の型紙に、同じ大きさの文様を配置してある。

図 1.2.1 の場合、「縦」「横」の文字は、正しく記されていると解すべきであるが、「型紙のサイズ」の観点から見た場合、誤っていることは明らかである。これは、文様に対する人間の主観的な「縦」「横」の判断が入ったために起こるものである。

そこで、図 1.2.2 のように型紙の辺の長

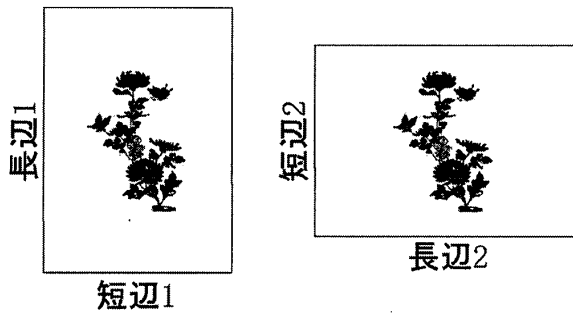


図 1.2.2 辺の長さを基準とした場合

さを基準とすることとした。

図 1.2.2 では、長辺 1 = 長辺 2、短辺 1 = 短辺 2 なので、型紙のサイズ（2 辺の長さ）を客観的に捕らえることができる。

つまり、長辺と短辺を用いて型紙のサイズを求めれば、“長辺の長さ”と“短辺の長さ”は、型紙の置き方によらない値として得ることができ、人の主観による影響を受けない計量分析ができる。

### 1.3 型紙の外寸／内寸の長辺と短辺

前節で辺の長さを基準とする型紙サイズを規定したが、ここでは、さらに進めて文様の彫られている領域についても、取り扱いの基準化を行う。

図 1.3.1 に本論文で用いる型紙の辺の長さの取り扱い方法を示す（以後、統一基準）。これにより、統計解析処理によって得られた結果の科学的再現性を確保できる。

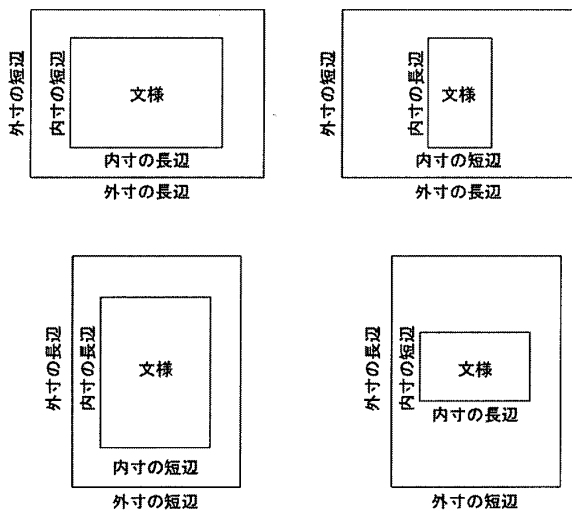


図 1.3.1 型紙の各サイズの取り扱い法と名称

## 2. 琉球紅型型紙の外寸

### 2.1 沖縄県立博物館収蔵型紙の外寸と沖縄県立芸術大学収蔵型紙の外寸

図 2.1.1 に県博収蔵型紙の外寸の散布図を示し、図 2.1.2 に県芸収蔵型紙の外寸の散布図を示す。それぞれ、横軸を長辺、縦軸を短辺とする。

図 2.1.1 と図 2.1.2 を見比べると、A, B, C, D への型紙サイズの偏りがあり、ほぼ同じであることが分かるが、確認のため、両方のデータを合わせて、一つの散布図を描くと、図 2.1.3 を得る。

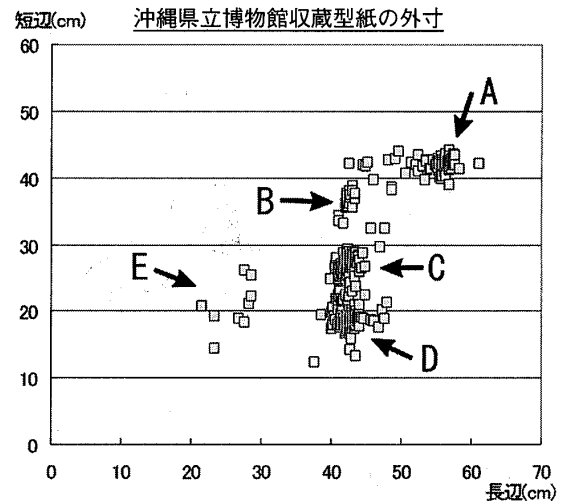


図 2.1.1 沖縄県立博物館収蔵型紙の外寸

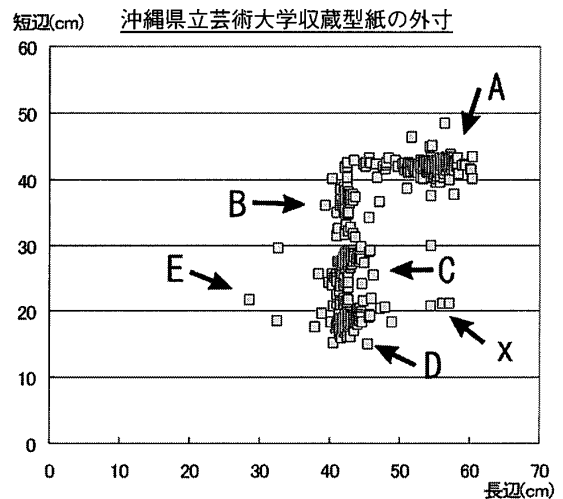


図 2.1.2 沖縄県立芸術大学収蔵型紙の外寸

図 2.1.3 を見ると、沖縄県立博物館と沖縄県立芸術大学の収蔵するそれぞれの型紙の外寸が、統一基準を用いて見たとき、同じ分布を形成することが分かる。このことは、非常に重要で、両機関に収蔵されている型紙が、同じ規格で作られたことを示している。拡大的に解釈すれば、同じ紙漉き場所で製作されたとも言えるかもしれない。

また、図 2.1.3 で特徴が出てきたのは、Bの分布である。さらに、Yの位置に新しい分布が得られていることも分かる。

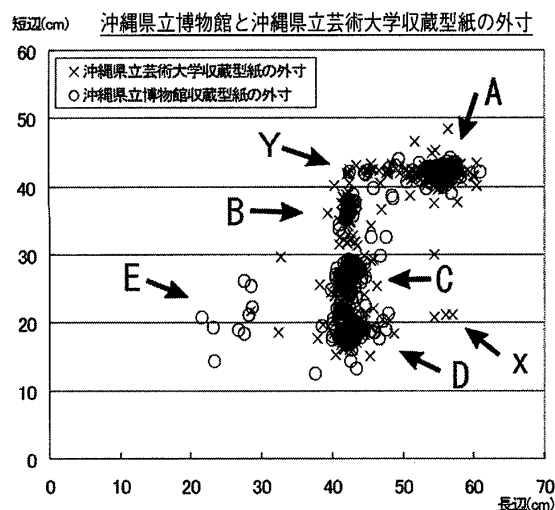


図 2.1.3 県博と県芸の収蔵型紙の外寸

図 2.1.3 より、A, B, C, D, E, Y に塊があることが明らかなので、それぞれの平均値、標準偏差を求めると、次の表 2.1.1 を得る。ただし、Xの分布については数が少ないので求めてない。

表 2.1.1 の A, B, C, D, E, Y の長辺、短辺の大きさの範囲 (レンジ) は、以下の表 2.1.2 とした。この範囲の値は、目視により与えた。ここで、下限はその値を含み、上限はその値未満である。

表 2.1.1 外寸の平均と標準偏差 (単位 : cm)

分類	平均・標準偏差	長辺	短辺
A (618)	平均 標準偏差	55.2 2.7	42.2 0.8
B (79)	平均 標準偏差	42.5 1.1	36.1 2.4
C (402)	平均 標準偏差	42.5 0.8	27.5 1.2
D (767)	平均 標準偏差	42.6 0.9	18.7 0.9
E (9)	平均 標準偏差	26.2 2.8	21.1 3.5
Y (30)	平均 標準偏差	45.6 2.6	42.2 0.8

注 1) 表中 ( ) 内は、型紙の数を示す。

注 2) AとBの重複35点は、Bに分類。

注 3) Yの30点は、Aと重複。

注 4) 総計1881点。未分類 6点。

表 2.1.2 型紙の大きさの範囲 (単位 : cm)

レンジ	A	B	C	D	E	Y
長辺の下限	40	37	37	37	20	40
長辺の上限	62	49	49	49	30	50
短辺の下限	37	30	23	13	10	40
短辺の上限	50	40	30	23	30	50

例) 長辺 :  $40 \leq A < 62$ 、短辺 :  $37 \leq A < 50$ 。

## 2.2 外寸による型紙サイズの法則

表 2.1.1 から、次のことが分かる。

- (1) B, C, Dの長辺は、Aの短辺に同じ。
- (2) Bの短辺は、Aの長辺の  $\frac{2}{3}$ 。
- (3) Cの短辺は、Aの長辺の  $\frac{1}{2}$ 。
- (4) Dの短辺は、Aの長辺の  $\frac{1}{3}$ 。
- (5) Eの長・短辺は、Aの長・短辺の半分。

すなわち、Aに分布する型紙を基本として、B, C, D, Eの型紙が作られている可能性を示している。これら (1)~(5) を図示すると、図 2.2.1 を得る。

表 2.1.1 および図 2.2.1 を見れば、古琉球紅型型紙は、大模様型を基準にして作り出されていると理解できる。従って、文献 [1] (pp. 65-66) で津波古聡は「大模様の型紙をその通りに割ると  $\frac{2}{3}$ 、 $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{3}$  の数値に当てはまる型紙は少ない」と述べているが、それは受け入れ難い。

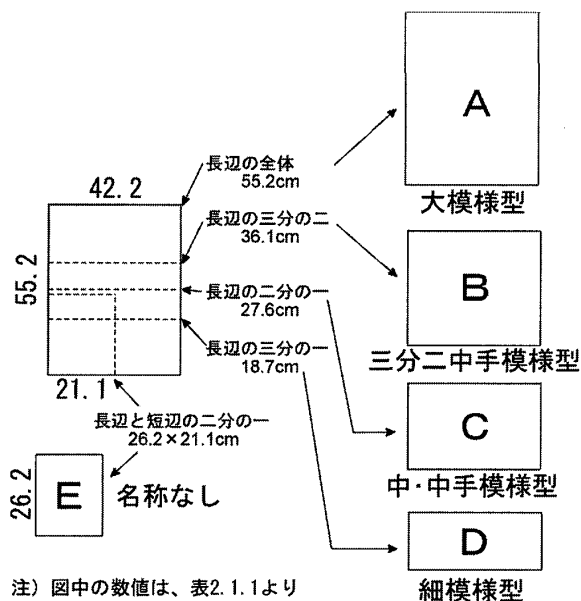


図 2.2.1 型紙の外寸による分類と名称

2.3 型紙の外寸の名称とその妥当性

図 2.2.1 は、現在の型紙の大きさの名称を用いて統計解析の結果得られた分類 (1) ~ (5) への名称を与えている。

これらの分類の中で、中手模様型、中模様型、細模様型は、既存の分類と異なるの

で、次の表 2.3.1 にそれらを示す。

表 2.3.1 において、平田、星、與那嶺の分類は、参考とした出所について記載されていないため、著者には特定出来ないが、分類が同じであることと年代から考えて、鎌倉の『沖縄文化の遺宝』と同一であろう。

ところで、著者が知る範囲では、紅型の型紙の外寸について、岡村吉右衛門が、文献上で最初に言及している。

定説では、A (大模様型：全紙) の“四分の一”の型紙は、Eとなる。しかしながら、Eは僅か9点しかなく、全数1905点の0.47%に過ぎない。従って、“四分の一”を古琉球紅型の型紙サイズのカテゴリ (細模様型・中模様型) に使うことは、妥当といえない。加えて、“四分の一”を指す伝統的な専門用語を聞かない。

すなわち、中模様型、細模様型については、本論文の図 2.2.1、表 2.3.1 の名称の

表 2.3.1 型紙の外寸サイズによる名称

名称	本論文 (又吉)	岡村 <sup>注1)</sup>	富山 <sup>注2)</sup>	鎌倉	星・與那嶺 <sup>注2)</sup> 平田・佐久本 <sup>注3)</sup>	渡名喜
大模様型	全紙 (A)	全紙	全紙	全紙	全紙	全紙
三分二中手模様型	三分の二 (B)	三分の二	三分の二	三分の二	三分の二	二分の一
中手模様	二分の一 (C)	二分の一	二分の一	二分の一	二分の一	
中模様型	二分の一 (C)	二分の一		四分の一	四分の一	
細模様型	三分の一 (D)	三分の一 四分の一	三分の一 四分の一	四分の一	四分の一	
基準箇所 (全紙)	長辺に対する割合	丈に対する割合		縦に対する割合		

岡村：岡村吉右衛門、『琉球古紅型』, p16, 有秀堂, 1967。  
 富山：富山弘基・大野力、『沖縄の伝統染織』, p.89, 徳間書店, 1971。  
 鎌倉：鎌倉芳太郎、『沖縄文化の遺宝』, p.247, 岩波書店, 1982。  
 星：星雅彦、『琉球びんがた歴史と技法』, p.24, 琉球びんがた事業協同組合, 1987。  
 與那嶺：與那嶺一子, 「沖縄県立博物館蔵紅型型紙の分類とその考察」, p.25, MUSEUM, No.489, 1991。  
 平田：平田美奈子・柳悦州, 『鎌倉芳太郎資料集 第二巻』, p.19, 沖縄県立芸術大学附属研究所, 2003。  
 佐久本：佐久本邦華・又吉光邦, 『紅型に秘された祈り ~今, 明かされる紅型の秘密~』, p.35, 沖縄教販, 2006。  
 渡名喜：渡名喜明, 「紅型の型紙と型彫りー城間栄喜ノートをもとにしてー」, pp.63-65, 沖縄県立博物館紀要, 第4号, 1978。  
 注1) 岡村は、“中手”の文字を用いていない。そのため、上表では“中模様=中手模様”とし、“三分二中手模様型”もあわせて網掛けをした。  
 注2) 富山, 星, 平田, 與那嶺は、全紙を分割する際の基準箇所を明示していない。  
 注3) 佐久本は、平田の『鎌倉芳太郎資料集 第二巻』より引用を明記。

割り振りが妥当であることを意味する。

次に中模様型については、細模様型と同じ大きさの型紙を用いており、細模様型との区別は、彫られた文様・模様の“細かさ”に視点を置いてなされると、岡村と富山を除く、鎌倉、與那嶺、平田は、表 2.3.1 に挙げたそれぞれの文献の中で述べ、それが現在の定説となっている。

そこで、型紙に彫られた文様・模様の“細かさ”について、『沖縄の染織（Ⅱ）紅型型紙編』<sup>5</sup>の“柄の大きさ”の分類と本論文の分類A, B, C, D, Eとの関連をまとめた。それを表 2.3.2 に示す。

表 2.3.2 “柄の大きさ”の分類と本論文のA, B, C, D, Eとの関連

分類	細／細柄 小柄	中柄 中	大柄 大
A (618)	4	18	596
B (79)	5	23	51
C (402)	68	246	88
D (767)	665	91	11
E (9)	0	1	8
未 (6)	1	1	4
計 (1881)	743	380	758

注) 表中の数字は、型紙の数を示す。

ここで、“柄の大きさ”について『沖縄の染織（Ⅱ）紅型型紙編』にある沖縄県立博物館収蔵の型紙の分類にある「小柄」は、「細」に含めた。また、同収蔵型紙の分類には「不明」「小紋」「中細柄」もあるが、これらは幸いにもA, B, C, D, E, そしてYに含まれなかった。

表 2.3.2 より、「中柄・中」はC（平均：42.5×27.5cm）に集中しているのので、分類上、全紙長辺の半分の型とするのがよい。これは、“柄の大きさ”の観点から見ても、

細模様型と中模様型の型紙の大きさは等しくないことを意味し、定説は受け入れ難いことを示している。

既存の中模様型と細模様型への定説は、D（平均：42.6×18.7cm）に分布する「中柄・中」（23.5%；91/386）に対する主張と考えられる。しかし、23.5%の「中柄・中」を分類の主にはできない。

また、型紙の大きさから見ても、CとDの短辺の長さには、9cmもの差がある。従って、CとDを同一の外寸として扱うことは、好ましくない。

中手模様型は、表 2.3.2 からC（平均：42.5×27.5cm）とするほうが正しい。Aが型紙の外寸より、“全紙”であり、BがAの長辺の“三分の二”であるため、中手模様型をCとするのは、妥当な帰結であろう。

以上より、本論文では、古琉球紅型の中模様型と細模様型の型紙の大きさについての分類は、「定性的かつ計量的に見て中・中手模様型は、全紙長辺の二分の一であり、細模様型は、全紙長辺の三分の一である。すなわち、基本的に細模様型と同一の大きさの型紙ではない。ただし、23%程度は、細模様型の型紙に中・中柄の文様が彫られている」と結論付ける。

ところで、與那嶺は、「紅型の型地紙は、型紙の大きさがすべてまちまちであるところから、大広奉書（45.5×60.6cm）、大奉書（39.4×53.0cm）、中奉書（36.4×50.0cm）、小奉書（33.3×47.0cm）といった寸法の越前奉書<sup>6</sup>がそれぞれに全紙としてではなかったかという考えである」<sup>7</sup>との説を唱えておられるが、上記の解析とその分析結果から

<sup>6</sup> 與那嶺は、越前奉書についての参考文献を明示していないが、文献 [1] (p.66) に同じ。明治以後、多くの和紙のサイズに変更があったことは、よく知られている。

<sup>7</sup> 「沖縄県立博物館蔵紅型型紙の分類とその考察」、與那嶺一子, p.24, MUSEUM, No.489, 1991。

<sup>5</sup> 外寸データを得た文献と同じ。沖縄県史料調査シリーズ第1集・沖縄県文化財調査報告書第126集、沖縄県教育委員会、徳間書店、1997。

支持しにくい。

古琉球紅型型紙と和紙についての研究は、姉妹論文の「古琉球紅型型紙と唐尺一型紙の大きさと文様配置への願いー」（又吉光邦，産業情報論集第4巻第2号，2008）に詳しく述べてあるので参照されたい。

## 2.4 模様型と“中手”

城間栄喜ノートをもとにして、型紙の大きさや柄について分類した渡名喜の論文<sup>8</sup>と著書<sup>9</sup>は、型紙のサイズと模様をはっきり区別して名称を与えている。これらは、他の論文で語られなかった点であり、高く評価できる。以下の表に、それらをまとめる。

表 2.4.1 型紙の大きさによる名称

型紙の大きさ	名称
全紙（大紙）	ウフカビ
全紙の半分	ハンメーグワー
全紙の三分の一	サンメーグワー

表 2.4.2 柄の大きさによる名称

柄の大きさ	名称
大柄	ウフガラ
中手	ナカティ
小紋／小柄	クムン

古琉球紅型の型紙の大きさは、表2.4.1の“サンメーグワー”に、“三分の二”を加えて分類すれば、渡名喜の示した城間栄喜ノートの分類が、統計的に正しいとみなせる。“三分の二”は、1881点中79点の約4.2%と少ないし、それを含めて“サンメーグワー”と呼ぶにことに対して、抵抗感はあるほどないのではないだろうか。

<sup>8</sup> 渡名喜明，「紅型の型紙と型彫りー城間栄喜ノートをもとにしてー」，pp.63-65，沖縄県立博物館紀要，第4号，1978。

<sup>9</sup> 渡名喜明，『ワイド版染織の美琉球紅型』，p.273，京都書院，1980。

次に、表 2.4.2 の“ナカティ（中手）”は、柄の大きさを指す名称であったことを示している。渡名喜の論文が、伝統的呼称を反映しているので表 2.3.1 に示したように、岡村が“中手”の文字を用い無かったのが頷け、かつ正しいと理解できる。

著者は、古琉球紅型の型紙の大きさに“中手”の文字が使われたのは、鎌倉による分類後に起こったことで、それは鎌倉が、“柄の大きさ”と“型紙の大きさ”が比例関係にあると認識したためであると推察している<sup>10</sup>。

最後に、特別な型紙として、鎖型くさいがたの型紙についてのサイズや名称に関する記述があり、それをまとめると表 2.5.3 を得る。

表 2.4.3 配置箇所による名称と大きさ

配置箇所による名称	大きさ
ワーカビ（上紙）	ハンメーグワー
ナカカビ（中紙）	サンメーグワー

鎖型の型紙の配置位置による名称についての情報は、残念ながら本論文で使用した『沖縄の染織（Ⅱ）紅型型紙編』には無い。従って、これらの統一的理解は、今後の研究課題としてご理解賜りたい。

## 2.5 型紙の外寸と彫り方

古琉球紅型型紙の外寸と彫り方の関連性についての計量的報告は、與那嶺<sup>11</sup>、平田<sup>12</sup>にあるが、それぞれの型紙収蔵先が異なるため統一的に論じられていないこと。また、本論文の 1.2 節の“琉球紅型の型紙のサイズ”、および 2.3 節の“型紙の外寸の名称とその妥当性”に関する考察から、そのま

<sup>10</sup> 鎌倉芳太郎は、「かたちき型附」の伝統的の文字から「びんがた紅型」という新しい当て字を普及させてもいる。

<sup>11</sup> 與那嶺一子，「沖縄県立博物館蔵紅型型紙の分類とその考察」，p.26，MUSEUM，No.489，1991。

<sup>12</sup> 平田美奈子，『鎌倉芳太郎資料集 第二巻』，p.10，沖縄県立芸術大学附属研究所，2003。

ま普遍的性質の研究結果として受け取ること、残念ながら出来ない。

そこで本論文では、沖縄県立博物館収蔵の古琉球紅型型紙と沖縄県立芸術大学収蔵の古琉球紅型型紙の外寸と彫り方について計量的に統一した見解を示す。ただし、「彫り方」は、『沖縄の染織（Ⅱ）紅型型紙編』に記されている通りとした。表 2.5.1 にそれを示す。

表 2.5.1 型紙の外寸と彫り方 (N=1881)

分類	白地型	染地型	すだれ型	半白地型
A (618)	466	125	0	27
B (79)	50	21	0	8
C (402)	245	129	1	27
D (767)	318	422	8	19
E (9)	1	8	0	0
未 (6)	1	3	0	2
計	1081	708	9	83

注 1) 表中の数字は、型紙の数を示す。

表 2.5.1 より、白地型は大模様型の A に多く、染地型は細模様の D に多いことが分かる。また、D 以外では、白地型の方が多くことも分かる。

これは鎌倉芳太郎が『沖縄文化の遺宝』(p.247) で述べた「染地型は殆ど細い線や点を彫って作られる」を裏付けている。

すだれ型は、もっとも数が少なく、C、D にあるが、ほとんどが D である。

半白地型は、割合的に見ると A、B、C に多く、それぞれ、A の 4.3% (27/618)、B の 10.1% (8/79)、C の 6.7% (27/402)、D の 2.4% (19/767)、E の 0% (0/9) となっている。

## 2.6 E, Y, X に分布する型紙

E に分布する型紙については、沖縄県立博物館収蔵型紙の方が、沖縄県立芸術大学収蔵型紙より若干多い。この差は、型紙の

収蔵数を比べれば、さらに明らかである。

一方、Y については、図 2.1.1 および図 2.1.2 を見比べると、沖縄県立芸術大学収蔵の型紙が多いが、これは型紙の収蔵数に比例している。この E と Y に分布する型紙は、その形状から、ほぼ正方形の型紙であることが分かる。次にそれを示す。

E (平均：26.2×21.1cm) で、9 点。

Y (平均：45.6×42.2cm) で、30 点。

E、Y に分布する型紙は、型紙の分類の上から、「正方模様型」のような名前がよいかもされない。ただし、伝統的名称ではない。

次に、X に分布している型紙であるが、これは沖縄県立芸術大学収蔵の型紙にしか存在しない。X に分布している型紙については、今後の研究課題として後日、明らかにできればと思っている。

## 3. 琉球紅型型紙と館蔵型紙の比較

### 3.1 館蔵収蔵の型紙

国立民族博物館（館蔵）型紙のうち、データが公表されている 100 点について、古琉球紅型の型紙と比較する。

100 点の型紙は、すべて「中形」で江戸後期の作である。群馬県前橋市の大黒屋本店伝来の型紙（大黒屋型）<sup>13</sup>である。

比較する館蔵収蔵の型紙は、古琉球紅型の型紙<sup>14</sup>と同様の統計解析処理をしなければならぬため、第 1 章の統一基準である型紙の長辺と短辺によって分類する。

次の表 3.1.1 に館蔵収蔵型紙の外寸の平均と標準偏差を示し、図 3.1.1 に古琉球紅

<sup>13</sup> 大黒屋型は、意匠構成や技術力に優れ、江戸文化の華のひとつと評される。

<sup>14</sup> 本論文では、沖縄県立博物館収蔵型紙と沖縄県立芸術大学収蔵の型紙の全体を指す。



型紙と一緒に分布図を示す。

表 3.1.1 と図 3.1.1 より、古琉球紅型の型紙の外寸と異なる事が分かる。

館蔵収蔵の型紙は100点程だが、分布の違いが明瞭である（大きな円の範囲内）。

表 3.1.1 外寸の平均と標準偏差（単位:cm）

名称	平均・標準偏差	長辺	短辺
館蔵型紙	平均	41.0	23.9
	標準偏差	0.60	1.37

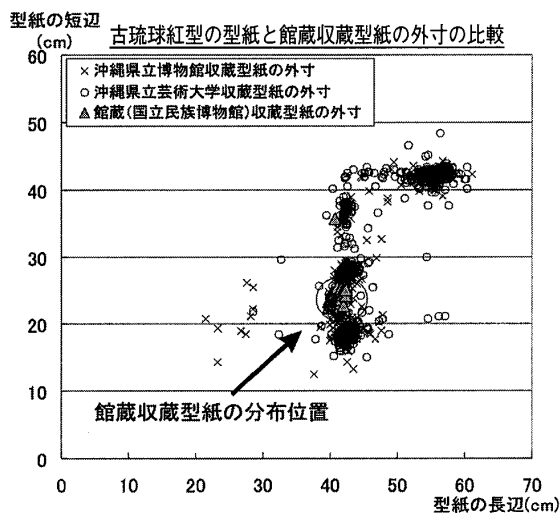


図 3.1.1 古琉球紅型型紙と館蔵型紙の外寸

### 3.2 型紙の長辺と短辺の比

型紙の外寸の長辺と短辺の比を取り、出現頻度をグラフにすると、図 3.2.1 を得る。

図 3.2.1 は、沖縄県立博物館と沖縄県立芸術大学がそれぞれ収蔵する古琉球紅型型紙は、ほぼ同じ分布を示していることを示している。

その一方で、古琉球紅型の型紙と館蔵収蔵の型紙は、違う分類に属することを明確に示している。

館蔵収蔵の型紙は、長辺と短辺の比が、黄金比1.618よりやや大きめの1.7付近に集中するのに対して、古琉球紅型の型紙は、黄金比近辺に分布することは無い。古琉球紅型の型紙は、1.3, 1.5, 2.2, 2.3辺りに頻度が高い。

以上より、古琉球紅型型紙と館蔵収蔵の型紙は、分類上、異なるとしてよいと言えよう。

この結果は、他地域の型紙も同様の処理、すなわち型紙の長辺と短辺の比を取ることによって、それぞれ個体差としての識別が

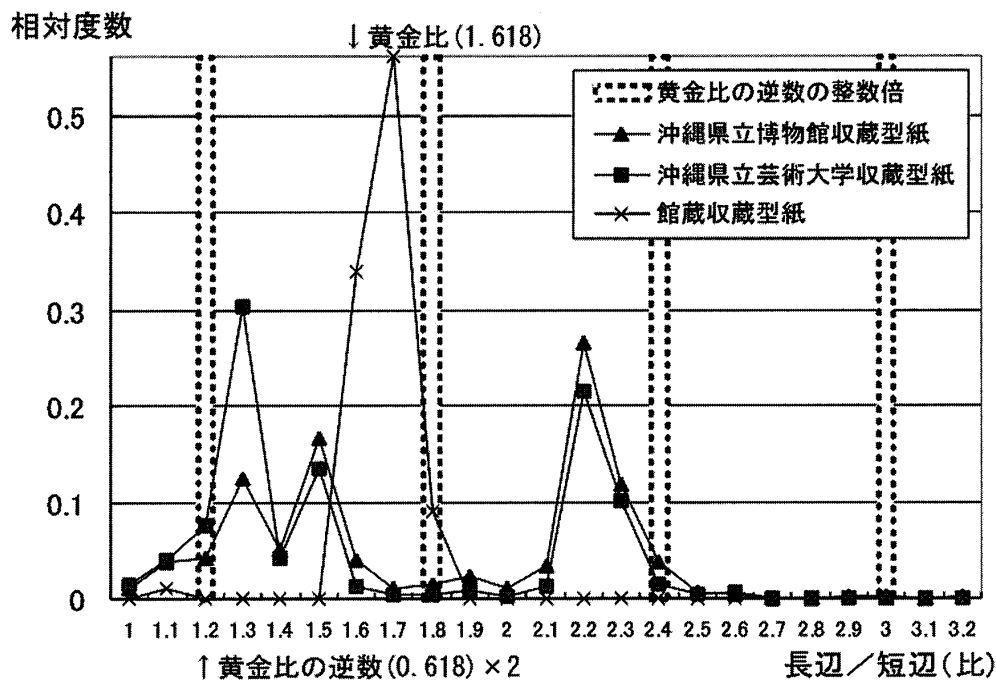


図 3.2.1 型紙の長辺と短辺の比

与えられることを示唆している。言い換えれば、型紙の長辺と短辺の比は、型紙の出身地を識別する指標となりうる可能性を示している。

書籍やWeb等による型紙の情報は、ほとんどが内寸のみの記載となっている。本節で明らかにしたように、外寸も非常に貴重な情報であるので、是非公開願いたい。

#### 4. まとめ

本論文では、沖縄県立博物館と沖縄県立芸術大学にそれぞれ収蔵されている古琉球紅型型紙の外寸に着目して、計量的に解析し、整理・分類した。

本論文の成果は、次のようにまとめることが出来る。

- (1) 型紙のサイズに着目する場合、“長辺”と“短辺”と基準化した。
- (2) 古琉球紅型型紙は、大模様型の型紙を基準にして作り出されていることを統計的に明らかにした。
- (3) 現在の学説で中模様型、細模様型が、“全紙の四分の一”とされているのは適切ではなく、それぞれ“全紙の長辺の二分の一”、“全紙の長辺の三分の一”とするべきであることを示した。
- (4) 渡名喜明の城間栄喜ノートを参考にした型紙の大きさの分類が、伝統的、計量的に確からしいことを述べた。
- (5) 館蔵収蔵の型紙と古琉球紅型の型紙を比較し、異なることを示した。
- (6) 型紙の長辺と短辺の比は、型紙の出身

地を識別する指標となりうることを示した。

内寸の長辺と短辺についての研究は、拙論文「古琉球紅型の内寸による分類および他地域の型紙との比較」と題して、本論文集と一緒に掲載されている。それには、館蔵収蔵型紙だけでなく、『染の型紙』（京都国立博物館，1968）と『染型紙－江戸～明治期における筑後柳川の染色用型紙－』（江崎栄一，2004）との内寸の長辺と短辺の比についての比較検討がなされている。

また、外寸と内寸、そして文様の配置などについての研究成果を「古琉球紅型型紙と唐尺－型紙の大きさと文様配置への願い－」と題して一緒に採録されているので、合わせて一読されたい。

#### 謝辞

本研究には、平成19年度 公益信託 宇流麻学術研究助成基金が使われている。本研究へのご理解に深く感謝したい。

本研究は、『沖縄の染織（Ⅱ）紅型型紙編』に記されている型紙の外寸データをコンピュータに入力する作業が必要であった。これらの作業を献身的に行ってくれた、沖縄国際大学産業情報学科の著者のゼミナール学生である金城明奈さん、久貝美里さんにこの場をお借りして、感謝したい。

投稿受付日：2007/07/18

投稿採録日：2007/09/24

## 付録

## 除去リスト

県博 <sup>注1</sup>	県芸 <sup>注2</sup>		
H-7 <sup>注3</sup>	G-53	G-1020	G-1387
H-10	G-57	G-1026	G-1388
H-13	G-120	G-1054	G-1389
H-14	G-128	G-1068	G-1390
H-28	G-186	G-1100	G-1391
H-32	G-300	G-1113	G-1392
H-34	G-303	G-1158	G-1394
H-78	G-304	G-1291	G-1395
H-81	G-521	G-1309	G-1396
H-214	G-591	G-1342	G-1397
H-219	G-593	G-1353	G-1398
H-221	G-627	G-1354	G-1399
H-244	G-652	G-1360	G-1400
H-261	G-655	G-1367	G-1401
H-307	G-761	G-1368	G-1402
H-312	G-769	G-1369	G-1403
H-314	G-795	G-1370	G-1404
H-315	G-797	G-1371	G-1405
H-364	G-806	G-1373	G-1406
H-365	G-823	G-1374	G-1407
H-401	G-835	G-1375	G-1408
H-423	G-843	G-1376	G-1409
H-465	G-855	G-1377	G-1410
H-468	G-857	G-1378	G-1411
H-469	G-865	G-1379	G-1412
H-475	G-876	G-1380	G-1413
H-480	G-885	G-1381	G-1414
H-487	G-958	G-1382	
H-544	G-966	G-1383	
H-548	G-971	G-1384	
H-555	G-974	G-1385	
H-575	G-1008	G-1386	

注1) 県博：沖縄県立博物館

注2) 県芸：沖縄県立芸術大学

注3) 添え字の番号が、『沖縄の染織(Ⅱ)  
紅型型紙編』の番号に同じ。

## 参考文献

- [1] 『紅型衣裳と型紙』, 沖縄県立博物館編, 沖縄県立博物館友の会, 1985。  
[2] 「沖縄県立博物館蔵紅型型紙の分類とその考察」, 與那嶺一子, MUSEUM, No.489, 1991。  
[3] 『沖縄県立博物館所蔵紅型型紙の分類とその考察(二)』, 與那嶺一子, 沖

縄県立博物館紀要, 第18号, 1992。

- [4] 『古琉球型紙の研究』, 鎌倉芳太郎, 京都書院, 1959。  
[5] 『古琉球紅型 上 第二期』, 鎌倉芳太郎, 京都書院, 1969。  
[6] 『沖縄文化の遺宝』, 鎌倉芳太郎, 岩波書店, 1982。  
[7] 『琉球古紅型』, 岡村吉右衛門, 有秀堂, 1967。  
[8] 『琉球びんがたの歴史と技法』, 星雅彦, 琉球びんがた事業協同組合, 1987。  
[9] 『鎌倉芳太郎資料集 第一巻 紅型型紙一』, 平田美奈子・柳悦州, 沖縄県立芸術大学附属研究所, 2002。  
[10] 『鎌倉芳太郎資料集 第二巻 紅型型紙二』, 平田美奈子・柳悦州, 沖縄県立芸術大学附属研究所, 2003。  
[11] 「藍型(イエーガタ)の技法—城間栄喜氏からの聞き書きをもとにして—」, 渡名喜明, pp.54-63, 沖縄県立博物館紀要第3号, 1977。  
[12] 「紅型の型紙と型彫り—城間栄喜ノートをもとにして—」, 渡名喜明, pp.63-73, 沖縄県立博物館紀要, 第4号, 1978。  
[13] 『ワイド版染織の美琉球紅型』, 渡名喜明, 京都書院, 1980。  
[14] 『「紅型」という名前』, 久貝典子, 沖縄学研究所紀要『沖縄学』第九号, 2006。  
[15] 『沖縄の伝統染織』, 富山弘基, 徳間書店, 1971。  
[16] 『沖縄の染織(Ⅱ)紅型型紙編』, 沖縄県史料調査シリーズ第1集・沖縄県文化財調査報告書第126集, 沖縄県教育委員会, 徳間書店, 1997。  
[17] 「古琉球紅型の内寸による分類および他地域の型紙との比較」, 又吉光邦,

- 産業情報論集第4巻第2号, 2008。
- [18] 「古琉球紅型型紙と唐尺—型紙の大きさと文様配置への願い—」, 又吉光邦, 産業情報論集第4巻第2号, 2008。
- [19] 『紅型に秘された祈り ~今, 明かされる紅型の秘密~』, 佐久本邦華・又吉光邦, 沖縄教販, 2006。
- [20] 『染の型紙』, 京都国立博物館, 1968。
- [21] 『染型紙—江戸～明治期における筑後柳川の染色用型紙—』, 江崎栄一, 2004。
- [22] 「沖縄県教育会附設郷土博物館が雑誌や展示を通して県内外に発信したメッセージについて」, 源河葉子, 沖縄国際大学経済論集, 第2巻第2号, 2006。